みんなで生きる　(1972年4月25日第三種郵便物認可)毎月1回10日発行

ペシャワール会報

No. 7

～アジアで共に生きる～

ペシャワール通信（2）　中村哲医師帰国報告会とペシャワール会総会について（3）
ペシャワールから見た日本（4）　中村哲所感（6）　ペシャワールを訪ねて（8）
北九州市に中村先生を迎えて（10）　中村先生と出会って（11）
パキスタンあれこれ（12）

ペシャワール通信(6)

中村　哲

みなさんお元気ですか。先日は、お電話ありがとうございました。パキスタン帰国直後より慌ただしく、ろくに通信もせず申し訳ありませんでした。先日は、なつかしくみんなの声を、きかせて貰いました。つい悲愴な気分になりがちの一人仕事なので、みんなの活動は頼もしい限りです。

仕事の方はステップ・バイ・ステップで、ワークショップも何とか形は整いましたが、正念場は、これからというところ。一年目は実情を理解することでもせいいっぱいのようです。ここは居れば居るほど、ききしにまさる対立、闘争の世界、多少神経がうつにならねば長持ちしません。小生も何に手をやくかというのは、人間関係と金の問題で、苦心惨憺です。遠くに居れば、小生がバリバリと立派な医療活動をして、苦しいながら、さぞ立派な仕事をしているとお考えがちでしょうが、事実はそうではありません。

先日もささいなことで、入院患者が病院と対立。小生が矢面にたたされると、今度は小生をかばう患者たちが他の患者と対立。不穏な状態となったのですが、私としては院内での発砲と傷害は、何としても避けたいので罵声をあびせて鎮めました。予算のことでも病院側の管理で、ワークショップの建物について、不当な値段の労賃が、私の留守に決定され、これにクレームをつけると病院側が、労働力の提供のうちきりを宣言。ペンキ塗りまで自分でするという始末。要するにヤボ用が多いのです。

しかし、それでも最近は多くの患者の指導層とアフガン人が小生に忠誠をおくようになり、事は少しずつスムースに運ぶようになりました。おかげで、理学療法、ワークショップの小屋も文字通り手作りで患者と協力して出来たようなものです。

まずは余りにおそまつだったライセンターの足元を固めてからで、人目をひくフィールドの活動などは、来年に本格化するでしょう。

会計係がみつかった由、嬉しく思いました。どこに行っても金の問題は頭痛の種で極度に気をつかいます。

さて、またお便りしましょう。江淵君が明日来るので、またよいお便りも彼を通じて伝わるでしょう。志満さんに伝えて下さい。「ボクも頑張ってるから、アンタたちもガンバラんとイカンよ―。」

ではまた。

(一九八五・一〇・一四)

中村哲医師帰国報告会とペシャワール会総会について

'85.8.4

中村先生の一時帰国に合わせて、八月四日にペシャワール会の総会が開かれました。

最初に、事務局からこの一年間のペシャワール会の活動報告がなされました。会が発足して三年になりますが、マスコミ等にはなばなしく取り上げられた発足当時のような派手さはなくなったが、中村先生の働きを本当に理解している熱心な会員に支えられた堅実な歩みが続けられていることが述べられました。しかし、一方、この間継続して会費を納入して下さっている会員が少なくなったこと、さらに、新しく入会される人も減少しているということが指摘されました。

このような指摘にもとづいて、今後、会員の獲得や、巡回診療車購入募金をどのように行っていくかについて、出席者全員で話しあいました。そこでは、年末募金の計画、教会やロータリー・クラブ、学校など諸団体へのアピール、会員名簿の配布、事務局の機能強化等、建設的な意見が沢山出されました。

次いで、中村先生が現地での活動報告をされました。現在、ペシャワールを中心とするパキスタン北西辺境州において、対策が最も立ち遅れ、多くの人々の生活を脅かしているハンセン氏病の治療に、これから力を注ごうとしていること、そのために、すでにハンセン氏病患者さんのための特殊な靴を作る工場を建てていることなどが、具体的に話されました。現地での協力スタッフと良好な関係を作りつつ、一つ一つ確かな働きをしておられる様子が、聴いている私達にもリアルに伝わり、後方で支援活動を行っている私達も決意を新たにさせられました。

また、この日会場には、パキスタンとアフガニスタンの生活や病気に苦しんでいる人達を支援するために設立された、アジア・レリーフ・ファンドから、アフガニスタン・カーペットや現地の珍しい民芸品の展示がなされ、楽しむことができました。

〃各地での活動報告会〃

今回の一時帰国中、日頃ご支援頂いている各種団体の要請を受けた中村医師は、ペシャワールでの活動内容について、各地で報告会を行いました。報告会の機会を設けて頂いた関係者の皆様方に心からお礼を申し上げます。

◆報告会を開催して頂いた団体名

有明高校(看護科)、若松中央ロータリークラブ、八幡中央ロータリークラブ、福岡西ロータリークラブ、前原ロータリークラブ、荒尾ロータリークラブ、名古屋サウスライオンズクラブ、北九州アジアを考える会、国立肥前療養所、岡山おく光明園、香住ヶ丘バプテスト教会、北九州ソロプチミスト、福岡YMCAアジアを考える会

なお、名古屋サウスライオンズクラブでは、特にクラブの国際活動の中心として、中村医師の活動を支援していくことを、クラブとして決議して頂き、加藤会長をはじめ四名の会員の方々が現地を訪問し、中村医師の活動を直接に見、理解を深められました。又、福岡、北九州地区のロータリークラブでは、ガバナー通信の中で、中村医師の活動をご紹介頂き、すべてのクラブがこの活動を積極的に支援することをアピールして頂きました。

(志満)

ペシャワールから見た日本

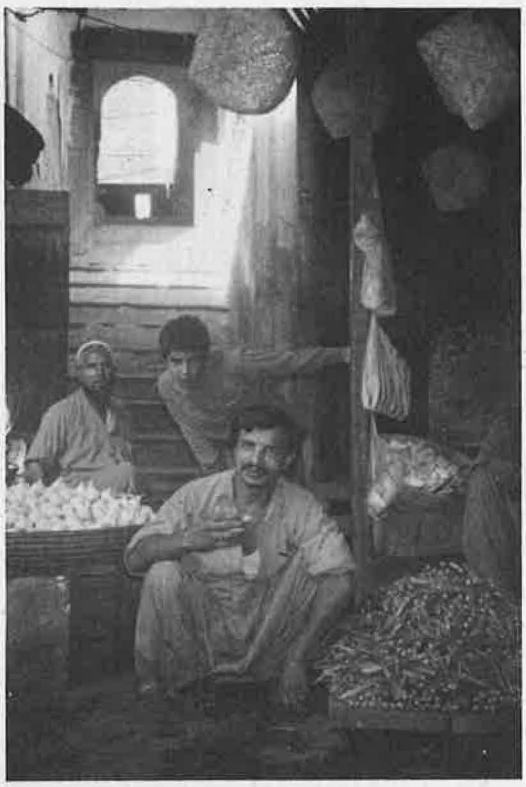
毎日新聞一九八五・八・二九（夕刊）

中村　哲

私が初めてパキスタンと関わりをもったのは七年前の一九七八年、ヒンズークッシュ山脈の秀峰ティリチミールへの遠征隊に参加して以来のことである。当時「医療協力」等ということは頭になく、ただ雄大なカラコルムの自然や私の好きな蝶に惹かれて当地を訪れた。しかしその折、感ずるところあってこの土地に惹かれ、その後も幾度か訪れたが、不思議な縁で昨年五月からその北西辺境の州都ペシャワールにJOCS（日本キリスト教海外医療協力会）から医師として派遣され、長期の医療サービスに従事することになった。

私の主な任務は、北西辺境州政府に協力してハンセン氏病の絶滅計画に強力な側面援助を行うことである。ペシャワールは、最近でこそシルクロードやガンダーラ美術ブームで知られるようになってきたが、日本ではまだまだ遠い存在である。パキスタンの中でさえ、この北西辺境はアフガニスタンと共に異質な世界とみなされることがしばしばある。古代からカイバル峠を越えて無数の征服と闘争がくりかえされたこの土地は、人の和を強調するわれわれ日本人にはなかなか理解し難いことも多い。州の大半は険峻な山岳地帯と岩石沙漠で、加えてアフガニスタンとの長大な国境線をひかえて政情も複雑を極める。このような中で、「医療協力」と称しても、いったい何ができるのかと、居れば居るほど無力感にとりつかれるのが正直なところである。

ハンセン氏病患者の総登録数は現在約四千名で、発見活動が増せば増すほどその数は増加し、五千名に達するのは時間の問題である。しかし問題は発見後のケアである。有効な薬剤の開発された今日では、かつての日本のように隔離政策をとらず外来治療を行いながら患者の社会生活を保障するのが基本方針である。一部の病型をのぞいては終生服薬が必要であり、神経麻痺、足底潰瘍等の合併症はしばしば患者の社会生活を脅かす。我々のケアも当然様々の局面があり、医学的なケアのみでなく、その土地の文化の根幹に触れるような社会生活への配慮も行わなくてはならない。先ず、地球が丸いことさえ常識ではない人々に病気の説明をするのが容易ではない。我々が常識とか教養とか思っていることそのものが異なるので、彼らの生活心得をくんで彼らのことばで治療について語らねばならないのである。また、最も保守的なイスラムの根強いこの地では女性を隠す習慣から、女性患者の発見とケアは難行を極める。（西部辺境では、女性患者の発見率は他の地域に比べて何と約半分の十数％である。）



さらに頭の痛いのは、国境を無視して往来するアフガン人の場合である。その所在がつかめないことも多く、つかめても政治的な理由でその家を訪れて家族内感染のチェックをすることもできない。（アフガン難民は現在パキスタン中に約三百万と推定され、そのうち約二百万人以上がこの北西辺境州に居る。難民といっても、既にエチオピアのような急性期はすぎてマスコミの紙面を賑わすことはなくなった。しかし、問題は慢性化して目立たぬところで実は深刻化しているのが現状である。ハンセン氏病でも同様であるが、問題が目立つときだけ騒いでおいて、物や金を投ずれば援助だとするのは余りにお粗末である。）ともかくも、私の仕事は先ずは現地の人々の心と生活意識をつかみ、その土地に適ったやり方を模索するのに悪戦苦闘といったところである。

現地に居て氾濫する日本製品をみるにつけ、複雑な気持ちで自分の国・日本を思いかえすことがある。日本の異常な豊かさと同時に、他国とくに第三世界に対する異常な無知無関心である。ペシャワールもシルクロード・ブームのおかげで、ようやくその名を知られるようになったが、増えたのは観光客とメイド・イン・ジャパンのみである。つくづく思うのは民間援助の層の薄さで、どうもわれわれ日本人には、何かおかみにお任せしておけば目立つことを何も率先して自分がやることはないと思っている節がある。確かに日本の第三世界諸国に対する国家援助額は急速に増加してきているが、それが国家間のとりひきの中で、果して有効に人々の福祉に還元されているかは疑問である。

私がペシャワールに赴く際にも、多くの共感と同時に多くの疑問も出された。その中で最も多かったのは、「現地なりに安定している社会の生態系を破壊するのではないか」というものであった。これに対する明確な反論を私自身もたないが、今、何が、これらの開発途上地域におこりつつあるかを知って貰いたかった。第一に、我々の民間援助なるものも、「社会の生態系」を変えるほどの力も規模もないという現実である。第二に、「近代化」の破壊的な影響は今や世界の隅々にまで及び、社会と自然の生態系は既に大規模に変質しつつあることである。繁栄は常に弱者の犠牲を要する。開発途上諸国は日・米・欧の近代化の下請けを担わされて、伝統社会は充分に矛盾の多いいびつなものになりつつある。

とは言え、ペシャワールでのゆるやかな時の流れの中で慌ただしい日本をみていると、日本は未だに、あの「大東亜」の夢を総力あげて経済戦争として継続しているかのようにみえる。日本製品はその優秀さの故にパキスタンでも他国を圧倒した。米英を宿敵とする住民たちが日本を賞賛するのは、あの占領下の屈辱を知る日本人の一人として悪い気はしない。しかし、人々が、商品経済で破壊された自己の共同体の現実を見つめなおす時、今度は日本がその元凶として過大な敵意をひきうける時代がここでもやって来ないと誰が言えよう。

我々が敗戦後に誓った平和と繁栄とは何だったのだろう。戦後四十年の今日、本当にアジアが「共栄」し、共に生きる道を、我々一人一人が真剣に考えなおす時期が来ているように思われる。

戦中から戦後を生きぬいたある詩人が次のような捨てぜりふを残して逝った。

「将軍たちよ。もし君たちの崩れた保塁に、錆びついた大砲が残っているならば、乾いた土の弾をこめ、われわれを砲撃してくれまいか。すばらしい飾り窓をねらうんだ。われわれの中にやけつくような紅玉の弾丸をぶちこむんだ。」

これは余りの貧しさと虚構の繁栄との間で私が覚える実感でもある。

ライ病とは

＝中村哲所感＝

ライ病は、ライ菌（Mycobacterium leprae）という結核菌に類似した細菌による、慢性の感染症である。発見者の名をとってハンセン氏病とも呼ばれる。

主に、末梢神経と皮膚がおかされる。主な初期症状は、皮膚の感覚障害と皮疹であるが、病型によって多少異なる。極めてゆっくりした進行で、症状がひどくなってくると、手や足の運動麻痺、顔面、手足の皮膚の変形、眼の障害等がおきてくる。手足の感覚が失われるために痛みを感ぜず、しばしば火傷外傷がくり返され、感染を併発してこれが手足の変形、機能障害の原因となることも多い。

やっかいな合併症として　①足底潰瘍（うらきず）と　②ライ反応がある。足底潰瘍は、無理な圧が足にかかっても痛みがないために、足のうらに潰瘍（皮膚組織が部分的になくなって、いわば傷ができる状態）を生ずるものである。ここから感染を繰り返し、骨がおかされ、足の変形脱落の一因ともなる。ライ反応は、治療中に突然、全身の炎症反応がおこり、発熱に伴って、皮膚や神経に障害を生ずるもので、ライ性結節性紅斑（ＥＮＬ反応）と反転反応と二種ある。ことに後者は、急激な運動麻痺をしばしばおこし、その後の患者の社会生活に大きな影響を与える。

感染は、幼児期に家族内感染するものが多い。皮膚から皮膚への感染が主であるとされているが、鼻汁等による（飛沫感染）等の説もある。潜伏期はきわめて長く、数年から数十年に及ぶ。

治療　一九四七年にサルファ剤の一種ＤＤＳが導入され、その後次々と有効な薬剤が開発された。これにより、症状の進行を止め感染性を失くすことが可能となった。現在の主要薬剤は、リファンピシン、Ｂ６６３（ランプレン）、ＤＤＳ等である。リファンピシンが最も有効であるが、発展途上国では、高価なため使用されないことも多い。

以上のように、医学的にみれば、ライは治療可能な感染症の一つとなったが、人々に余り知られてないことから、様々の偏見に基づく社会的問題がつきまとう。（日本にも現在約一万人の患者が居り、沖縄では今でも年間数名の患者が新しく出る。）

ＷＨＯの推定では、世界中に約一、五〇〇万人（一九八〇年）と見積もられ、そのうちわずか三五〇万人が治療下にある。治療法の進歩によってかつての隔離政策から外来中心の治療にかわってきたが、発展途上国では、定期的に継続して服薬させることがしばしば困難で、物資や資金の欠乏と重なって、ライ対策は、今なお難行しているのが実情である。特に、いかにして、患者の良い社会生活を保障するかは大きな問題で、金や薬を与えれば済む問題ではない。ライにたずさわる医療スタッフは、医療上のことだけでなく、様々な社会的問題に直面して悪戦苦闘しているのが、世界中に共通する事実である。

古来よりライの問題は、人間に普遍的な差別・偏見の傾向と深く関わっている。世界中に救ライ組織が設立され、他の病気に比べるとむしろ患者数の少ない本病に対して精力的な努力が払われて来たのは、単に哀れな人を助けるという以上のものがある。おそらく、人間の在り方そのものの中に、深く根ざす何ものかに、触れるものがあるからであろう。

どうして靴が大切か

ライという病気の中で、最も厄介なものの一つに足底穿孔症というものがある。これは、ライ菌が主に末梢神経を侵すために手や足の温痛覚が失われることによるもので、わが病棟の患者の入院理由の半分以上を占める。

長歩きをしたり無理な力を足にかけると通常ならば痛みを覚えて休んだりして適当に足をかばっているが、痛覚が失われるとこの自然の防御機構が働かない。特に無理な圧力がかかりやすい場所ではその皮下組織がやられて、潰瘍――いわば皮膚に穴ができる状態を生じてくる。

治療そのものは単純で時にはギブスを巻いて足の安静を保たせておき感染をおこした傷には抗生剤を与えておけば、一時的には、ほぼ完治する。ところが問題は治って退院しても大抵は再び同様の状態になって数ヶ月後に舞い戻ってくる。これを繰り返していくうちに患者は職を失ったり離婚されたり、様々な社会生活上の問題を抱えこむ事になる。大抵の患者は小作農民であるから、「怠け者」として地主に村を追われることもまれではない。

しかし無理をして働けば今度はこの潰瘍から感染をおこし、足の変形・損失を生ずることになる。いずれにしても「たかが足の裏の傷」では済まされないのである。また同じ患者に高価な抗生物質やギブスを湯水のように使うのでは経済的にも大きな負担となる。この入退院のいたちごっこを絶つ努力が大切な事はいうまでもないが、問題はそれほど簡単なものではない。歩かないのが最も良い方法だがそれは社会生活上不可能である。

そこで我々としては予防的な面を重視して体重が足底の一部にのみかかりにくいようなサンダルの生産を企画している。こうして潰瘍の発生を最小限くいとめようという訳である。もちろんこれは靴さえ与えればよいというものではなく予防の為の教育と組み合わせて行わなければならない。一方スタイルも大切で、その土地の人々に受け容れられ易い恰好も工夫しなくてはならない。

私はペシャワールの鞄屋街をいつもうろうろして回っているが、事情のわからぬ人々は、はるばる日本から来たお医者さんが靴屋を病院に開いて……などという声も聞かれる。足のケアが全ゆる意味で、ライ治療の要だという事がなかなか理解してもらえない。いつも病棟で患者の足の裏の傷をみながら、こいつの為にどれだけの被害が患者にかかるのかと、うらめしげに包帯をとりかえる毎日である。

〝溝口さんからワークショップのためにと多額の御寄付〟

先年、シルクロード・ツアーの途中、パキスタンでバス事故に遭われ、奥様と、奥様の御姉様を失くされた、福岡市・溝口病院院長溝口博様から、靴のワークショップの建設資金にと、建築費一五〇万円を御寄附いただきました。溝口先生が、事故処理が終った後、在パキスタン日本大使館に「パキスタンの皆様に大変お世話になりました。何かパキスタンのためにしたいのですが―」と相談された時、「福岡だったら中村医師を送り出しているペシャワール会があるので、連絡してみたら」と大使から教えられたそうです。

溝口先生は、丁度私共ペシャワール会の問田会長とは旧知の間柄で、御寄附の申し出をいただきました。不思議な御縁を感じさせられます。

この御寄附を基に、ペシャワールにハンセン病患者さんの靴のワークショップが建てられており、現在完成に近づいています。この工場から生み出される靴によって今後大勢の患者さんの足が守られることでしょう。

ペシャワールを訪ねて

長谷川　裕子

南回りでカラチに着いたのは、6月23日午前3時。ロビーに人影は少なくクルタパジャマの男が4、5人休んでいる。深夜の為女性がいないと思っているとトイレに布を敷いて婦人が2人横になっている。ここはイスラム社会。女性は、他人にあまり顔をみせないという風習がある。

飛行機でラワルピンディに飛び、そこからバスで彼の地に向かう。二千年以上も前にアレキサンダー大王が遠征し、ずっと昔から東西文化の交流の街として栄えているペシャワール。そして何よりも中村先生が働いていらっしゃると思うと、胸の高鳴りを抑えられない。暑い陽ざしと埃の中を通り抜けて、やっと懐しい先生の笑顔に再会する。

ミッションホスピタルは、例年は6月から3ヵ月程度夏休みに入り、患者は自宅療養となるが、今年は特別に診療活動している。早朝から内科の外来患者の受付は、30人もいるかと思うほどの人だかり。行列の横を通り狭い門をくぐると、広場の奥に小じんまりとライ病棟が建っている。小さな芝生の前庭があり、外の喧噪は嘘の様に静かだ。

患者やスタッフは、緊張ぎみの私を笑顔と握手で迎えてくれた。患者の表情が予想外に明るいのに驚き、又、安心もした。彼らは日常生活や将来のことなど思い悩むことが多いはずなのに、与えられた人生に陽気に立ち向う姿が印象深かった。

午前9時、スタッフミーティングの後、回診が始まる。一人の女性患者に会った。5年前に一度治療を受けていたが、遠方の為通院できず症状が悪化したという。今は体中に潰瘍ができて息をするのも苦しそうだ。数週間もかけて通院するのが困難な彼女のような例はよくある。日本とは随分事情が違う。又、宗教上、女性が男性の医師に診察してもらうには偏見があるので、実際はかなり多くの女性ライ患者がいると中村先生は予想する。患者が来院するのを待つだけではなく、こちらから出向いて患者を捜すことから始めなければならない。

現在、土曜日は往診日にあて、中村先生自身の運転で駆け回る。道路事情が悪いので、ジープがあると先生の移動診療も楽になると思う。男性患者は殆んど足の潰瘍が原因だ。ペシャワールの夏は、気温が40度以上もあり、皆素足でサンダルを履いているのだが、ライ病には皮のサンダルが悪いらしい。先生は、一見、普通のサンダルと変わらないが、底にクッションをつけた衝撃の少ないものを開発している。病院の近くのバザールの靴屋街では、靴博士といわれる位に有名だ。入院患者が開発中のサンダルを履いているそうで、効果がでているとのこと。

地理的影響でアフガン人も多く、患者兼小間使いの15～17歳の少年（自分の年齢も知らない）は、兄を亡くし、父親もアフガニスタンに行ったきり帰って来ない。平和な消費文化の日本で暮らす私には想像もできない緊迫した生活だ。ペルシャ語を教えて貰った少年はけなげに働いていてとても素直だ。ライ病棟の職員が彼に英語を教えている。

ペシャワール州には、12前後のライ病院があるが、免許を持った医師は少ない。1983年迄ライ治療の中心は、州都ペシャワール市のミッションホスピタルだったが、現在は、ペシャワール市営の病院が名目上中心となっている。ただ、技術や待遇、スタッフの人間性などからミッションホスピタルを希望する患者は多い。

ライ病棟には、10年以上の経験を持つ3人の職員がいるが、彼らは、正規の医療教育を受けていないため、中村先生が週一度勉強会を開いている。又、運営、設備の会議も月曜に一時間あり、中村先生を中心にスタッフ同志のコミュニケーションは深く、先生に対する信頼は厚い。スタッフに病棟を案内してもらうと、あちこちに、先生の努力のあとが伺える。病室の扇風機から各人の体温計とポットの配給、薬棚、患者が不自由な手足で平易に着れる服やサンダルなどに至るまで雑用が多

い。病院の資料整理もスタッフが十分な教育を受けていないので、先生自身が統計をとらなければならない。

こうしてみると、先生は一人二役どころか、何から何まで一人で処理しなければならないので、先生の健康が心配になる。そこで、尚子夫人の存在は大きい。元看護婦の尚子夫人は、よき理解者として先生を支え、先生自身と秋子ちゃん、健ちゃんの健康を十分気づかう。又、先生がくつろげるひとときを作るのも尚子夫人です。

中村先生は、単に病気を治すだけではない。患者達の生活に入り込み、互いに理解した上で活動している。そんなところに人間的なぬくもりを感じ嬉しくなり、さらに、福岡での支援の輪を確実に広げようと思った。

ペシャワールは、日本程発展していないが、活気に満ちた街だ。人々の生活は、貧しくてもみんな生き生きとしている。女性が顔を覆うチャドラも単に閉鎖的ではなく、陽よけ、埃よけと実用的な面もある。人々の顔は、西洋系あり、インド系あり、東洋系ありと民族が入り乱れ、ここは、正に東西が融け合う地。長い歴史、文化を持つ、魅力溢れる街です。

医薬品を携えて

福岡登高会　新貝　勲

今夏、パキスタンの山に行った。その際、哲ちゃんからの便りで、診療の為の医薬品やライ患者が履く特別なスリッパの材料などの調達と輸送が依頼されてきた。私共は出発前に医療品等の寄贈依頼。各方面に依頼し、又新聞紙上でも報道していただいた。その結果は多大なもので、台糖ファイザー、福岡市薬剤師協会、九薬、又個人で病院に勤める一看護婦さん等、大変な量となった。私共が考えていたより、はるかに多量となったが、現地でこれを待っている哲ちゃんや、患者さんのことを思うと、どうしても我々の手で運ばねばと、全部登山隊の隊貨にもぐりこませた。

五月二十九日、私達は懐しのラワルピンディに着いた。待ちわびた哲ちゃんが、迎えに来ていると思っていたが、呑気ものの哲ちゃんは、まだ来ていない。翌日、我々の隊貨は無事税関を通過した。大量の医薬品などが見つかれば、必ず一悶着おこるが、スムーズに事は運んだ。夕方、哲ちゃんと再会した。

「ヨッ！」「ヨッ！」「元気か」「元気だ」ぐらいのもの……。でも十梱包からなる医薬品等を見ると、さすがに嬉しそうだ。奥さんも子供さんも元気で、子供さんは現地にも馴れて、幼稚園に通っているとのこと。彼が働くミッション病院も少しずつ事が運び、意見もしだいに取り入れられているとのこと。満足そうだった。夜遅く、彼はミニキャブに荷物を運んで帰って行った。

今回、哲ちゃんと話し合う時間は短かかったが、パキスタンの服に身を包み、髭を生した姿は堂々たるものだった。その哲ちゃんが、だんだんと、パキスタンの医療について語る時、それは先進国の医療設置との比較だった。それは悔しさがにじみ出ているようにもあった。振り返って見た時、その母体となるペシャワール会の活動……。彼の苦労を考える時、私達は一層の努力が必要だ。来春、パキスタン観光省主催の第五回ツーリズムコンベイションがペシャワールで開催される。私も出席するが、哲ちゃんとの再会を約している。そして哲ちゃんの医療活動に接することができる。できたら皆で一度、哲ちゃん激励ツアーでも考えてみようか。

北九州市に中村先生を迎えて

田代栄二

中村哲夫先生の夏期を利用しての帰国の報に接し北九州市内で、先生の活動を支える活動としている者達が話しあい、左記の集会を催し、ペシャワール会の組織の拡大、強化に努めた。

◎7月25日　午後7時～9時
小倉北区真鶴会館にて

スライドにより、ペシャワール辺境地域の状況と医療活動の現状と問題点、特に今後の方針について中村先生の話を承り、質問の時間を設定、なごやかな中に真剣な話し合いがなされ、支援体制の必要性を一層明確に示された。

今回は、集会を夜間に設定し通勤帰りの方々の参加をと思い計画をなした。

出席者20名、現地で作られた民芸品の展示もされ興味をひき、有意義な集いであった。

◎7月26日　午前10時～午後1時
八幡西区天神町カトリック教会

北九州アジアを考える会主催

中村哲先生を迎えての昨年度に続き第2回目の催しで、スライドを利用しながらの現地の状況と医療活動と問題点の指摘、特に診療車の必要性についての指摘もなされ、これの支援に対する気持ちを一層昂揚された有意義な集会であった。出席者約30名。

◎8月16日　午後1時半～2時半
八幡東区芳賀ビルにて

ソロプチミスト会8月例会に中村哲先生を招いてペシャワール会の話を承りたいとの申し出があり、中村哲先生、案内役として田代が同行、ここでもスライドを利用し、現在の状況と医療活動の現状と問題点と題して中村先生より話がなされ少しでも支援をとの意志の表明がなされ感激であった。

◎8月22日

八幡区内の医師のライオンズクラブの例会にて

中村哲医師のペシャワールにおける医療活動の現状を承りたいとの申し出があり、当日中村哲先生、ペシャワール会事務局より1名出席し、有意義な集会が催された。

◎その他　7月27日若松区における中村哲先生の御親族、知友の方々の集会が催された由。

又、吉沢先生（北九州地区のペシャワール会の世話人の一人）による若松区内の医師によるライオンズクラブの例会において中村先生を迎えての特別集会が催された様である。

以上の様に中村先生の帰国中の多忙な生活の中で企画された、一つ一つの催しは、必ずしも盛況であったとは言えないが、それぞれの集会に集まられた方、一人一人がペシャワール会の趣旨を真剣に受けとめられ、これに対する支援の気持が示され、強め、広められる機会となったことを思い感激で一杯である。

要は中村哲先生がいつも口にされている様に地道に、コツコツと活動を永続させることが大切であることを再確認し、今度まかれた種子を大切にしていかなければと委員の方々と反省をこめて決意を新たにさせられている昨今である。

「中村哲先生と出会って」

北九州アジアを考える会　内山礼子

私たちが中村先生と初めてお会いしたのは、一九八三年九月、福岡でのペシャワール会の発会式でした。どの様な会かもわからないままに参加したのは、岩村先生のお名前と、ペシャワールという郷愁を帯びた言葉に惹かれたからかもしれません。が、壇上で朴訥と話される中村先生はすっかり私たちを魅了してしまいました。それは、恐らく先生が真摯に、自然や人間、医療と対峙されている飾りけの無い姿に、心うたれたからだと思います。

北九州市の「アジアを考える会」が発足して一年足らず。試行錯誤していた私たち委員の中から、献身的に働いておられる先生を支えたいという声が上がったのは当然のことだったかもしれません。

その後、一九八四年五月、北九州市でのペシャワール会発会式で私たちは先生にお会いし、ますます先生のお人柄にひかれ、意気軒昂として先生支持の意志が固まったのです。

この一月、私たちはお忙しい出発前の先生に強引にお願いして、北九州まで足を運んでいただきました。アジアを考える会始まって以来の多くの方々の参加があり、会は盛大に行われました。

ペシャワールの大自然、賑やかな市場、そこで起居する人々、ライ患者等、スライドを見ながら先生のお話を聞きました。おかげでカンパも多く集り感謝の気持でいっぱいです。

先生は、宇宙船地球号の一乗員としての視点を常に持ち続けておられ、痛烈に日本を批判し、今後の日本人のあり方を示唆されました。

高度文明社会で多くの情報に埋もれている私たちは、今、本当に人間らしい生き方をするために大きな選択を迫られています。日常生活に埋没していたのでは的確な意志の決定は出来ません。そのような中で、先生との出会いは私たちにとって大きな支えとなることができたと確信しております。

先生がペシャワールに出発されてからは、ペシャワール会報を通して先生のご活躍を知らせていただいております。先生の言葉が光り輝くこともあり、情熱が伝わって来ることもあれば、重く肩にのしかかることもあります。しかし、着々と進められているペシャワールでの計画をみますと優柔不断なことは言っておられません。唯、前進あるのみです。

行動されている先生が目の前にいらっしゃいます。私たちは、それをどうして放っておくことが出来るでしょう。

先生が力を入れておられる「ハンセン氏病」という病名を知ったのは私が中学生の頃だったように思います。たしか「小鳥の春」というライ患者をテーマにした本でした。思春期の少女にかなり強いショックを与えたのは事実です。その後、書名は忘れましたが、阿部知二の本を読みました。この本の中で、ライ病を患ったが故に愛する人と別れなくてはならなかった哀しさ、切なさを知らされました。重く、苦しい人生です。今でも思うと、ライ病を患った人の孤独感が伝ってくるようです。

医学は進歩し、日本ではライ病も不治の病ではなくなりました。先生は希望を持って歩き続けられております。そして、ペシャワールに行かずにおれなかった先生のお気持がわかるような気がします。どうぞ先生のロマンが拡がり、成就できますよう、心からお祈り致します。

北九州アジアを考える会一同、小さな小さな会ではありますが、先生に支えられ、できるだけのことをさせていただき先生との接点を持ち続けていきたいと思っております。

今後ともよろしくお願い致します。

パキスタンあれこれ

ラフマンの詩③

江淵　徹男

今回も、パシュトゥン文学の詩人、ラフマン・バハの詩をご紹介します。

額に炎を燃やし続けろ　ろうそく
人々から誇りというものを奪い取るから
いつになればはっきり見えて来るのだろう
　褒美のろうそく
蛾がぐるぐるとまわりを飛び廻る
ろうそくは他人の心にも火をつけるから
秋の炎の上で君がからだを焼き尽くせ
蛾にことばで合図を送れ　ろうそく
　お前の仲間は　すご腕の金貸し
世人は誰も　ラフマンの様にロウソクを見い出
すことなど無いのだ

君の庭に咲く花は松明よりも明るく輝く
　松明よりも明るく輝く君の庭に咲く花は
君の庭と森に住む大烏(からす)は私の希望の鳥(ハマー)の様だ
　私の希望の鳥の様だ　君の庭と森に住む大
烏(からす)は
私の頭のこの痛みは　君が王国の竜涎香[2]だ
君が王国の竜涎香だ　私の頭のこの痛みは
恋[3]人の乳房の傷跡は　空では愛の日輪だ
　空では愛の日輪だ　恋人の乳房の傷跡は
正しい人の道無くして　ラフマンの心が安らぐ
ことなど無い
ラフマンの心が安らぐことなど無い　正しい人
の道無くして

①ハマーは吉兆を顕わすと信じられている鳥
②竜涎香は、マッコウクジラの胆石から取られる香料
③或は、恋人の心の中の煩悩や悔恨か

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、JOCSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
③本会は、派遣母体であるJOCSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
④会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑤会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。ただし二口以上の人は同時にJOCSの会員になることができる。
⑥本会は会誌の発行を行ない、会員は会の拡大に努める。
⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
役員の改選は毎年総会にて行う。
⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
⑨本会の事務局を福岡YMCA
（〒八一〇　福岡市中央区大名一-一二-八
☎七八一-七四一〇）内におく。